都道府県別賞一等

形のない道標

群馬県　前橋市立富士見中学校　三学年

山岸　理桜子

「おいおい、どこへ連れて行くんだ。」

そう言って笑っていたおじいちゃんの声が、ふと頭をよぎった。けれど、その声は思い出でしかなく、静かな火葬場にはすすり泣く声だけが響いていた。

火葬が終わり、おじいちゃんは小さな箱に入って帰ってきた。それを見たとき、『おじいちゃんはもういないんだ。』という現実が少しずつ心に染み込んできた。祭壇に飾られた遺影は、いつもと変わらない優しい笑顔だった。でも、その笑顔に「ただいま。」と言っても返事は返ってこない。私はただただ悲しくて、涙が止まらなかった。

葬儀が終わった後、大人たちが会話をしているのが聞こえた。そのとき初めて、私は葬儀にはたくさんのお金がかかることを知った。生命保険のおかげで、家族はお金の心配をせず、おじいちゃんを送り出すことができたのだ。

後日、おばあちゃんから、おじいちゃんが生命保険に加入していて、その保険金の一部を私のために遺してくれていたことを聞いた。

「理桜子が将来、大学に行きたいと思ったときに少しでも力になれるように。」と。

その言葉を聞いた瞬間、胸がいっぱいになった。思い出したのは、おじいちゃんと二人で公園に行った日のことだった。おじいちゃんは車椅子だったので、私が押して公園を歩いた。でも、慣れない私は思うように動かせない。

「おいおい、どこへ連れて行くんだ。理桜子は車椅子を押すのがへったくそだな。」

「ごめん、おじいちゃん。思うように動かせないんだよ。」

「あはは、理桜子の運転は危なっかしいな。ほら、次は左だ、左！」

「おっけい、しっかり掴まっててよ！」

二人で大笑いしながら公園を歩いた。あの日の何気ない時間は、私にとって何より大切な宝物になっている。

おじいちゃんが私の未来を想って遺してくれた保険金は、本当にうれしかった。でも、その優しさに触れるほど、『まだ一緒にいたかった。』という気持ちがあふれてきた。もう一度公園を歩きたかった。もう一度笑い合いたかった。あの優しい声で「理桜子」と呼んでほしかった。けれど、おじいちゃんが生命保険に込めてくれたのは、お金だけではなく、『これからも元気に生きてほしい。』

そんな願いだったのだと思う。

あの日のおじいちゃんは、もう私のそばにはいない。でも、その愛情は生命保険という形になって、私たち家族の未来を支えてくれていた。

私は今まで、生命保険を「亡くなったときにもらえるお金」としか考えていなかった。でも、それは違った。もしものとき、遺された家族が困らないように。悲しみの中でも、前を向いて歩いていけるように。生命保険には、家族へのそんな想いが込められていたのだ。

私は、おじいちゃんが託してくれた未来を大切に生きたい。勉強も、これからの人生も努力を積み重ね、いつか「頑張ったよ。」と胸を張って言いたい。そして、私も大人になったら生命保険に入ろうと思う。おじいちゃんから受け取った愛情を、今度は私が大切な人へとつないでいきたいからだ。

生命保険は、ただのお金ではない。

それは、大切な人が最後に遺してくれた、目には見えない愛情だったのだ。

「おいおい、どこへ連れて行くんだ。」

私は迷わずに言う。

「おじいちゃんの想いを、未来まで。」